

# 伊藤博文のカナダ旅行

二 大窪 愿

伊藤博文がカナダを通過して旅したこと、世間にはあまり知られていないようである。ところが実際に当時は侯爵であった伊藤博文は、ロンドンへの往路カナダを経由して、オタワでは総督を訪問したり政府当局者と接触もしているのである。

このことは幾種類かある伝記のなかに記述されているかどうか、まだ調べていないが、偶然に古ぼけた或る小冊子を手に入れたことから、その旅行の様子と当時のカナダの事情を幾分でも知ることができたので、かいつまんで紹介してみたい。

その冊子の筆者は松本君平という。長野県人で早くアメリカに学び、「米国文学博士」と称したが、当時はまだ三十に満たない気鋭の文筆家であった。後に松本が政友会の代議士になり、普選運動にも活躍したことは知る人ぞ知るであろう。

冊子は一三五ページ、題して「米風欧雲録」という。明治三十六年、東京の廣文堂発行とあって、このうち最初の三〇ページほどが、伊藤の旅行とカナダ事情の記述にあてられている。読んでみると、なかなか愉快な、稚気にあふれた明治調の文体であるが、問題なのは、旅行に松本自身同伴しながら、東部カナダでの日程などがあまりはつきりしないことで、恐らく数年たってからメモにでも基いて書いたものでなからうかと推測される。

そこで、オタワに来たので、当時の現地の新聞などに当たってもらったところ判明した点もあるので、その記事にも文中ふれてみることにする。

さて、一八九七（明治三〇）年、侯爵伊藤博文は、前年八月第二次内閣を投げだしてから在野の身であったが、当年六

月英京ロンドンで催されるヴィクトリア女王の即位六十年の式典に日本政府を代表して参列するため、五月七日正午、横浜出港のエンプレス・オブ・インディア号に乗船して、一路ヴァンクーヴァーに向うのである。船客には伊藤一行のほか、グラッドストーン内閣の前閣僚モーレーや駐日英国公使のサトウなどの知名人がいたのは面白い。サトウといえ、幕末維新の間、伊藤が俊輔と称して働いていた頃からの親しい仲であったから、船中回顧談の花を咲かせたかもしれないのである。勿論松本君平も乗客のなかにいた。

「起きろ、起きろ、船は着いたぞ」と英語でどなって皆を起すものがあるので松本が誰かと見たら、博文その人で、船足は意外に速く、五月十八日早朝ヴィクトリアに着いたのであった。早速午前中に、ヴァンクーヴァーの日本領事館（一八八九年開設）から領事が挨拶かたがた現地事情の報告に船までかけつけて、近頃カナダでは日本人排斥熱が盛んになり、労働問題から転じて政党の問題、さらに立法院の問題にまでなった。カナダ人の日本人に対する感觸は甚だよくない。これは必ずしもカナダ人が悪いのでなく、従来日本人がカナダ側に好印象をあたえる手段を欠いていたからである。そこで閣下の御来着は大いに日本人に対するカナダ人の悪感情を融和するに有益なものであります、といったことを述べる。これについて「ヴァンクーヴァー・クロニクル」の記者が伊藤侯にインタビューに来て長時間話してゆく。これが翌日同紙に三ページの長文記事として出る。

## ヴァンクーヴァーに到着

船は中国人の検疫に手間どり、同夜十二時、ヴィクトリアを出港して、十九日午前五時、ヴァンクーヴァー（晩香坡）に着いた。伊藤はヴァンクーヴァー・ホテルに一泊することになった。カナダ政府は、侯を歓迎するため、儀仗兵を正午ホテルの正面に整列させ、軍楽を吹奏させた。「是れ同州政府が日本に向て表示する所の好情なるを忘るべからず」と松本は記している。また太平洋鉄道会社社長は伊藤一行のために、自分用の特別車を提供してくれた。「これまた同会社が日本人に対する懇志」と松本は記している。

なお松本もこの地は初めてであったから市中見物に出かけ、「電気車に投じ」、東西に南北に観察して歩いた。午後、伊藤も馬車で巡覧した。夜は領事館で日本料理の夕食会があり、松本らも列席した。松本によれば、「バンクーバー旅館」（ママ）のホテル代は一日食事共四ドル（八円）、一夕の入浴料一ドルで比較的高く、靴みがき代二〇セントは法外なのに驚いたという。

松本の描くヴァンクーヴァーはどうであったか。港は「幼稚に属し、多く談るに足るものなし」と手きびしいが、太平洋岸ではサンフランシスコを除いて及ぶものがないから、将来ますます東洋諸国との貿易交通に偉大な関係を有するに至ること疑いをいれずと見通しを述べ、さらに港が、背後にオリンピアン山脈を負い、北方には海岸に沿って高い峯があるほか、ヴァンクーヴァー島が太平洋から来る烈風をふせぐ天然の良港であることを説明する。実にヴァンクーヴァーは「太平洋貿易におけるカナダ大陸の咽喉であ

り」、また英国が濠州大陸をおさえる唯一の関門である。地勢から、経済上軍事上も将来ますます英国ならびにカナダ諸邦の要地となることは論ずるまでもないが、同市が最近驚くべき発達をとげたのは、太平洋鉄道の全通（一八八七年モントリオールから初列車が到着）、太平洋汽船の開航による。エンプレス・オブ・インディア、エンプレス・オブ・ジャパン、エンプレス・オブ・チャイナはみな太平洋汽船に属し、船足は他社船より五日も十日も速い。ハワイ、フィジー向け船便は月一回であるが、今やカナダ政府は太平洋電線を架設する計画に着手した。こうして太平洋の物質的進歩は将来十年間に光景を一変させるであろう、と松本は予言する。

市は一八八六年六月の大火で全焼したが、B・C州は木材の生産がきわめて多いところから、当時の家屋はすべて木造であったものが、それ以後は石造煉瓦建てに変わって、十年のうちに今日の偉観をあらわしてきた。製造工業も大いに見るべきものがあり、製鉄場、砂糖精製場、石灰製造場などがあるが、何といてもB・C州の木材交易の中心であって、市内に巨大な「裁木機械場」が多い。人口はほぼ二万人で、シナ人労働者が約一万、日本人労働者二千人であるが、これら多くは、聞くところによれば「無頼の漂民」で、一定の職業なく恒産なく太平洋岸を喰いあらしたものだから、同州でしばしば日本人排斥運動を試みられるのも深く怪しむに足りない、と松本は在住日本人に対して批判的である。伊藤も「深く日本の将来を憂慮せられ、在留日本人民の品行改善進歩をはかるの希望をもって、